

2月20日306回 フィリピンは今どうなっているのか

— 止まらない戦争（テロ）、背後にあるものは？ —

話題提供 大橋健司さん（元高校教師 フィリピン支援活動者）16名

長年、フィリピンの支援活動をしている大橋さんに話していただきました。

最初に、フィリピンについての基礎知識を教えてくださいました。国土面積は日本の8割、人口は日本とほぼ同じで、日本から首都のマニラまでは4時間弱で行けます。高層ビルとスラムが同居するマニラの写真は、この国の貧富の差が激しいことを象徴的に表しています。熱帯のフィリピンでは、平地ではイチゴやリンゴなどは栽培できませんが、マニラの北の山岳部バギオでは涼しい気候を利用して栽培されています。その技術は戦前そこに移民した日本人の子孫がもたらしたものとされています。

フィリピンは、スペインの植民地時代にカトリックの布教が開始され、それに対してイスラム勢力の抵抗（モロ戦争）がありました。C20にアメリカによる植民地化がすすめられると、反米独立闘争、1941年以降の日本軍の侵攻、統治が始まると抗日武装闘争がはじまる・・・という具合に100年以上戦争が続き、全土で農民が村のリーダーのもとに武器を持って戦いました。これが「暴力の文化」となって現在にまで引き継がれています。1965年～1986年のマルコス大統領の独裁政権時には権力の腐敗がはびこり、新人民軍やモロ人民解放戦線が結成され、近年は海外と繋がる過激派武装組織も現れ、その暴力の文化は小さくはなってきたものの収まる気配はありません。

特にミンダナオでは武装組織の活動が活発です。それはバナナ農園での格差、キリスト教・イスラム教・土着民族の民族的違いなどが内戦の引き金になっています。そんな中でたくさんNGOが活躍し、日本人が個人で設立している「ミンダナオ子ども図書館」もその中の一つだと紹介されました。

参加者の関心は1991年に破棄された米軍基地のことでした。その5年前マルコス独裁政治が倒され、アキノ政権誕生し、その流れの中で米軍基地の延長は破棄されました。その理由は、ベトナム戦争終結で基地の利用価値が減ったこと、火山の爆発で基地機能をほとんど失ってしまった所もあったことだと大橋さんは説明されました。6年後には中国の南沙諸島進出にともない、再び米比軍事協力の条約が結ばれました。

その他にも参加者からたくさん質問が出されました。

「どんな支援活動しているのか？」→“ICAN”は、名古屋の団体で、反政府勢力の兵士を平和的に生活できるように講座を開いたり、無料の医療援助をしたり、和平交渉のオブザーバーをサポートしたりしている。日本政府のODA資金にも一部依拠。ノーベル賞受賞のICANではない。「言語は？」→公用語は北部タガログ語、中部ビサヤ語、南部ムスリム語。小学校はタガログ語と英語で、高校ではほとんど英語で授業。「特権階級はどういう人？」→長い間大土地所有制であった流れで、今もその社会構造を引きずっている。「ドゥテルテ政権について」→国民の2割が麻薬に侵されている。中国・アメリカ・日本との関係を均等

にとっているように見える。「経済は？」→日本企業がたくさん進出。雇用期間は2～5年で、圧倒的に非正規労働者が多い。「識字率は？」→90%が学校へ行っている。近年6×3×3制へ。スラムの子どもについては把握できない。Street Childrenが多い。教育費は無償だが給食はない。「子どもたちの貧困と暴力について」→ミンダナオの農村部では大人になったら銃で村を守るのは青年の役割という意識を持たせられている。

また、「プランテーションでの貧しい生活はグローバル資本主義社会の構造的なものだという観点が必要」「日本はフィリピン政権が米政権に一定の距離を置こうとする外交の足を引っ張ろうとしている。フィリピンとの平和的つながりを追求すべき」という意見もありました。

大橋さんは、どんな質問にも詳しく答えてくださいました。私たちはこの国について知らないことばかりだと痛感させられました。